

〔研究ノート〕

学生による授業評価の、実施時期が 評価におよぼす影響

古 宮 昇

1. 研究の目的

本田（1999）は、全国191大学に在籍する約1500名の大学生を対象に調査を行い、彼らの授業への満足度が全国的に低いことを明らかにした。授業の質を高めるのは各大学における重要な課題であり、そのための効果的な方法の一つに、学生からフィードバックを受けることがある（Davis, 1993; 野邊, 1998）。そこで学生による授業評価を利用して、教授法の向上や大学教育の充実を図る努力をしている大学が多く存在することは、周知の事実である。そしてこのことは日本のみならず、外国においても同様であることが、米国ミシガン大学の McKeachie 教授（大学教授法における著名な学者であり、自身がずば抜けた教育者としても知られる）のインタビュー発言から伺える。彼は、「学生による授業評価は多くの国で採用されてきているが、私たちの国で出くわすのと同じ抵抗に遭っている」と述べている（Landrum, 1999）。

学生による授業評価は授業の質を測定するひとつの方法であるが、測定には必ず誤差がつきまとう。そして誤差要因のひとつとして、その実施時期があるのではないかと私は考えた。

多くの大学では、学期（セメスター）の最終授業時に評価を実施するのが慣例かもしれない。しかし、最終授業は、普段はあまり出席しない学生の多くも出席する傾向があるので、そのような学生が多く含まれると評価の信頼性を低下させる懸念がある。そのため教員の中には、「学期を通してろくに授業に出席しなかった学生から評価をされるのは不公平だ」と感じる者もいるであろう。

この懸念のために、私自身は、学期の最終授業ではなく、学期が終盤にさしかかった頃の、もっとも出席率が低いと予想される週をあらかじめ決めておき、その週に評価を実施してきた。具体的には、1セメスターで13週の授業が開講されたときには、その10週目の授業あたりである。しかしそれでは、私の授業の質の低さに辟易して欠席がちになっている学生からは評価を受けないことになる。そのため、評価結果が不

当に好意的になる恐れがある。

このように、授業評価は、それを実施する時期によって結果に影響が及ぶ可能性がある。ところが、授業評価に関する研究は多数存在するにもかかわらず（長澤ら、1997；長澤ら、1998；野邊、1998；本田、1999など）、その実施時期が評価に与える影響を実証的に検討したものは、私が調べた範囲では無かった。そこで私は、授業評価の実施時期が評価に与える影響を調べることを目的とし、本研究をおこなった。

この研究では具体的には、出席率が低い日の評価ほど高い授業評価につながる、という仮説を検証した。この仮説はつぎのような論理で導かれた。つまり、出席率が低い週に評価を行えば、出席意欲が高い学生から評価を受けることになり、彼らは授業に好意的な学生が多いだろうから、高い授業評価が得られるであろう。反対に、学期の最終授業日など、出席率が高い時期に評価を行えば、授業に不満を持つゆえにそれまでは欠席がちだった学生からも評価を受けることになるから、授業評価は低くなるであろう。

2. 研究の方法

大阪経済大学（都市型で中規模の、経済・人文系単科大学。学生数は7,000名あまり）で開講された一般教養科目「心理学」（週1回90分の授業、通年4単位）において、同一学期内に、同じ受講生集団を対象に無記名の授業評価を2回おこなった。その年には通算25回の授業がおこなわれ、1回目の評価は、21週目（2002年12月）の講義時間の最後を使っておこなった。21週目に評価を行ったのは、それが大学祭休みの少し後であり、例年の動向から考えて出席率が最も低いだろう、と予測したからである。2回目の評価は、その学年の最終授業週（25週目：2003年1月）に、講義時間の最後を使っておこなった。なお、この年には休講はなかった。

調査は次のようにおこなった。学生に何も書かれていない紙を配り、次の教示を教室前方のスクリーンに大きく映写するとともに、教示を担当教員が音読した：

- I. この授業を「5. 良い, 4. やや良い, 3. どちらとも言えない, 2. やや悪い, 1. 悪い」で正直に評価してください。当てはまる数字を用紙に書き入れてください。なお、みなさんの評価は来年度の「講義概要」で公表します。
 - II. この授業について、「ここをこうすればもっと良くなる」という点があれば、具体的に書いてください。
 - III. この授業について、「ここは良いので変えるべきでない」という点があれば、具体的に書いてください。
- なお、このアンケートは匿名です。学籍番号・氏名は書かないでください。

用紙は、講義終了時に教室を出る時に学生に提出させた。この研究報告では、上記Ⅰの5段階数字評価結果のみについて報告し考察する。

3. 結 果

1回目の評価（2002年12月）は、履修登録者429名のうち272名（回収率63%）から受け取った。2回目（2003年1月）は、評価者数189名（回収率44%）であった。1回目の評価は、最も出席率が悪いだろうと予想した12月初めに行ない、実際に私の目測では出席数は他の期間よりも少なかった。しかし授業評価提出者数は、12月初めよりも1月最終講義のほうがさらに少なかった。しかし授業の出席数は私自身の目測では、1月最終講義の出席数のほうが明らかに多かった。同じ授業評価を2度も行なったことを面倒がって、最終授業では評価紙を提出しない学生が多く出たのだろう、と推測する。

授業評価の平均は、「5.良い～1.悪い」の5段階評価で、1回目（12月初め）が4.03、2回目（1月最終授業）が4.31であり、仮説とは反対に、最終講義での評価のほうが高かった。その理由を、本研究では客観的な根拠によって確認することはできない。しかし私は理由として、2つの可能性が考えられると思う。

1つ目の可能性だが、私は、12月評価の日の講義よりも、最終回の講義のほうが、学生に感銘を与える質の高い講義ができた、という個人的な強い印象を持っている。そのことが、授業評価に影響を与えた可能性がある。つまり、学生の授業評価が、授業の一年間を通したトータルな質のみならず、評価を実施した当日の授業の質にも左右された可能性である。

2つ目は、同じ授業で2度も学生評価を行なったにもかかわらず、2度目にも素直に協力してくれた学生は、おしなべて授業について好意的だった可能性である。反対に、2度も学生評価をすることへの反発から2度目には評価用紙を提出しなかった学生は、この授業について否定的だった可能性がある。つまり2度目の評価では、非好意的な学生は評価表を提出せず、好意的な学生が多く評価表を提出したのかもしれない。

4. 考 察

本研究は、学生の出席率が悪い週におこなう授業評価のほうが、出席率の良い最終授業でおこなう評価よりも高い評価になるだろう、という仮説を実証的に検証することを目的としておこなわれた。しかし、出席率が良いだろうと予測した最終授業では、評価に協力する学生が少ないという意外な結果になったため、当初の仮説を検証する

ことはできなかった。しかし、本研究では次のことを示唆する結果が得られた。授業評価の結果は、1年間（もしくは1セメスター）を通じた授業の質ばかりではなく、評価をおこなった当日の授業の質によっても影響を受ける可能性がある。

私は、授業はそもそも学生のためにするものだから、学生に対して「この授業はどうですか？ 良いところ、変えるべきところを教えてください」と問い掛けるのが当然のことだと思っている。それゆえ私は匿名の授業評価をセメスターごとに実施しているし、今後も続けて行くつもりである。学生による匿名のフィードバックは授業改善に役立つと感じる。また、学生の声を聞く、という態度を行動によって示すことが、学生—教員間のラポール形成に効果がある印象を持っている。

何よりも、学生による授業評価が授業の質を測定する信頼できる道具の一つであることは、2,000を超える実証的研究によって確認されている（McKeachie, 2002）。

しかし、測定には必ず誤差が生じる。学生による授業評価も、それが一種の測定である以上、誤差が含まれている。たとえば金（1998）は、スライド・OHPを全く使用しなかった授業についての学生評価で、約半数の学生がスライド・OHPの使用についての評価項目で、選ぶべき「使用しない」を選択する代わりに、なんらかの数字評価をしたという、授業評価の妥当性を疑わせる結果を得た。このような結果は、授業評価の重要性を学生に理解させていないときか、学生—教員間のラポール（信頼関係）が乏しいときに生じるのかもしれない。また、林（1999）は授業評価が、教室のサイズ、学生の成績、教員の年齢という要因によって影響される可能性がある、と述べている。

私は、学生による授業評価を実施するさいには、その結果には誤差が含まれる事実を心にとめることと、その誤差を最小にする努力が大切だと考える。

文 献

- Davis, B. G. (1993). *Tools for teaching*. Jossey-Bass.
- 林雅代 (1999). 「学生による授業評価」の効果と限界. 『社会と倫理』17, 25-40.
- 本田義章 (1999). 意図的学習を目指す学生を育てるために—学生満足度調査からの提案. 『大学教育学会誌』21(1), 27-39.
- 金明哲 (1998). 「学生による授業評価」の信頼性について. 『社会情報』7(2), 201-205.
- Landrum, R. E. (1999). Fifty-plus years as a student-centered teacher: An interview with Wilbert J. McKeachie, *Teaching of Psychology*, 26, 142-146.
- McKeachie, W. J. (2002). *Teaching tips: Strategies, research, and theory of college and university teachers* (11th ed.). Boston: Houghton Mifflin.
- 長澤宣親, 笠原輝明, 福永卓之, 松村恒, 村山正雄, 山口巖, 広重佳治 (1997). 学生アン

- ケートに基づく一般教育改革の評価.『大学教育学会誌』19(2), 70-74.
- 長澤宣親，笠原輝久，福永卓之，松村恒（1998）. 第20回大会関係論文 フォーラム 学生アンケートに基づく「コースゼミ」の評価.『大学教育学会誌』20(2), 165-168.